

被災地ので活動するボランティアの後方支援をする

「風に立つライオン基金」

さだまさしさんは、「風に立つライオン基金」を立ち上げ、災害被災者の支援や医療難民のために世界をわたり歩いている医療団の支援に取り組んでいます。その活動の考え方に共感したカーコンビニ倶楽部の林成治社長は、さださんの取り組みを応援する活動を始めています。前回に引き続き被災地支援の実態やボランティアの現状について話す二人の対談は、ますますヒートアップしていきます。



カーコンビニ倶楽部  
代表取締役社長 林 成治  
Seiji Hayashi

林…危険が伴うので、そんな無責任なことを行政としては頼めませんからね。

被災地で活動する  
ボランティアの人たちが  
「風に立つライオン基金」が  
後方支援!!

林…日本は、このところ幾つもの大災害を乗り越えてきました。東日本大震災があり、熊本の大震災や北九州の豪雨災害など、毎年のように大きな災害が続く中で、ようやくボランティアの活動が日本でも根付いてきたのではないのでしょうか。

さだ…昔はね、ボランティアの人が平然と、「弁当はいつ出るんですか」というぐらいの「とぼけた時代」もありましたからね。でも、今は、ボランティアがどういものか一般の人たち

にも認知されていて、何をするか、どうすればいいのか、がしつかり理解されてきています。実は、僕らが災害の現場に入ってから驚いたのは、「昔やんちゃだったけれど、改心してボランティア活動を行っている人たちが一番頼りになる」という意外な事実でした。

林…えっ!? 元暴走族だったりする人たちが、被災地支援で活躍しているんですか。

さだ…彼らは行動力もあるし体力もある。しかも、一途さがある

りますからね。被災地で炊き出しをすると、そこにそんな人たちが一緒に入ってくれます。段々仲良くなって、仲間になっていくわけです。それが、次の災害と言つとイヤな話だけれど、次に災害が起きた時に彼らから電話が入って、「私たちが現場に入ります」と連絡が来る。北海道の地震の後、2日後には炊き出しに入ってくれました。震災が起きた2日後に、被災地に入るのには行政には依頼できないことですからね。

さだ…でも、勝手に入るのはかまわないわけです。だから、ボランティアの人たちが勝手に災害の現場に入ってくれるのを僕らが後押しするという形になった。彼らは、イザという時のために支援物資を備蓄しています。それを持って炊き出しに向かうわけです。備蓄した支援物資は使えばなくなるので、それを僕らが補填しているのです。

林…私がカーコンビニ倶楽部を買取ったのが2011年の1月。その2カ月後に東日本大震災が起きました。会社を買い取ったのは用意していたものの、後は、順調に運営して行けばよいと考えていたタイミングで大震災が起きたわけです。あつという間に資金は枯渇してしまいました。

さだ…それは大変でしたね。

「風に立つライオン基金」は私の思いにピッタリ。だから応援したい!

林…当然ながら被災地の人たちの応援もしなければなりません。それで、トラック7台分の水を被災地に届け、私は個人的に借金をして見舞金を渡すために被災地の加盟店を回りました。私たちは物を送っただけですが、被災地で復興のお手伝いを実際に行っている人たちがいます。その方々に、何らかの応援をしたいとずっと考えていま

た。それで、「風に立つライオン基金」が私の思いにピッタリだと知り、この基金を加盟店の方々と一緒に応援して行こうと、今動いているわけです。

さだ…そうだったんですね。元々、「風に立つライオン基金」は、それほど広大なことを考えていたわけではなくて、医療難民のために海外で頑張っている日本のお医者さんをささやかに応援するぐらいならできるところではないかと思つて始めたのです。すると、すぐに、鬼怒川が決壊する騒ぎが起き、熊本の

震災、北海道に台風が3つも上陸するなど次々に災害が起きた。僕らも、この災害に何かできることはないのかということ、基金としても被災地支援に取り組むことになったのです。

林…さださんが被災地に行つて感じるの、どういうことなのでしょう。

さだ…やはり、必要なのは「若い力」なんです。泥かき一つとってもそうだし、僕らロールが行つてもたいして役に立たなくてね(笑)。

「元気が出たよ」と喜んでくれる時の笑顔がたまらなく嬉しい!!

林…でも、さださんと同じ世代の人たちに話を聞くと、みんな「ボランティアで人の役に立ちたい」と言っています。たいして役に立てなくても他人事とは思えないから、何かの役

に立ちたいと思つている。私もその一人です。その思いが、もしものときのために折りたたみ式の電動アシスト自転車を買った。マに積んでおけば、クルマが身動き取れなくなつたとしてもその電動自転車です。そこから脱出して家に戻るかもしれないという発想につながつた。しかも、その電動アシスト自転車の売上の一部が「風に立つライオン基金」を通じて被災地支援に回るわけですからね。

さだ…僕は、「元気が出たよ」と言つて言うことぐらいしかできませんが、それでも現地に行つて歌を歌つたり、炊き出しをしたりすると、みんな「元気が出たよ。ありがとう」と喜んでくれる。その笑顔がたまらなく嬉しいんです。



ミュージシャン  
さだまさし

1952年生まれ。長崎市出身。シンガー・ソングライター、小説家。1976年ソロのシンガーとして活動を開始。「関白宣言」「北の国から」など数々のヒットを生み出す。2015年、一般社団法人「風に立つライオン基金」を設立(2017年公益法人として認定)し、さまざまな助成事業や被災地支援運動を行っている。